

自然としての人間（ヒト）

“人生というのは、星や岩や炭素原子と同じように、ただそこに存在するというだけのことであって、意味というものは持ち合わせていない（ジャレド・ダイヤモンド）¹¹”

人間（ヒト）は、他の動植物と同じように自然の一部に過ぎないのでしょうか。それとも、文明を作り上げたという点で、他の動植物とは一線を画する特別な存在と考えるべきなのでしょうか。この根源的な問いに対する答えは、人種、宗教、職業、などによって大きく異なり、正しい答えなどないのかもしれませんが。人間分子論では、人間（ヒト）は自然の1つの構成要素に過ぎないと考えます。本論全般を貫く、大切な出発点、前提です。以下、その考えを順次ご説明していきましょう。

自然の1構成要素という点において、人間（ヒト）は、動物、植物、微生物、そのあたりに転がる石ころとさえ、何ら変わるところはありません。もし、人間を特別というのであれば、同じ程度に、動物も植物も微生物も石ころも、特別であると言わねばなりません。ただ、その特別の意味合いが、それぞれに異なります。特別の意味合いに、良いも悪いも、上等も下等もありません。そのような区別は、人間が他の構成物を眺めた際の便宜的な区別です。害虫・益虫というのは、人間にとって益がある、害がある、と言うことであって、自然そのものに、良いも悪いもないのです。人間は、後から進化して、複雑な生体構造を持つ生物なので、自分達で勝手に高等と思っていますが、下等と言われる微生物には何十億年も生き長らえているものがあり、どちらが本当の意味で高等なのかわかりません。地球上の自然を構成する4つの基本要素が、エネルギー・水・空気・物質です（注1）。水・空気は、ビーカー（地球）の中に満たされた溶媒のようなものであり、そこに生物および非生物などの多くの物質が含まれています。物質は、ビーカの溶媒の中に、浮かび、流され、変化する、溶質のようなものです。エネルギーは、水・空気・物質を時間的・空間的に変化させる駆動力であると同時に、それらの真の姿でもあります。この4大基本要素からなる自然は、静的なものではなく、動的なものです。エネルギー・水・空気・物質（厳密には、その最小単位である元素）は、地球上で見ればその総量は変わりませんが（注2）が、時間的にも空間的にも流動と変化を繰り返しています。この流動と変化を、「見える化」すると、大小様々な渦と考えられます。渦は、生成、分裂、合体、消滅などを繰り返しながら、留まることなく、大きさや形を変えています。生命とは、エネルギー・水・大気・物質のダイナミックな大循環を構成するはかない1つの渦なのです。渦は、大きな循環からエネルギーのおこぼれをもらって弱々しく誕生し、短い時間、動的な平衡状態を保ちますが、その短い一生を全うすると、大きな循環の中に静かに戻っていきます。しかし、全体としての自然の本質は何一つ変わりません。だからこそ、人間（ヒト）は、意識する、しない、に関わらず、その短い渦運動の中に永遠の幸せを投影しようとするのです。4大基本要素の大循環の中の1つの渦であるという点において、人間（ヒト）は、動物、植物、微生物、そのあたりに転がる石ころと、何ら変わるところはないのです。

自然は、火山・地震・豪雨・津波など、甚大な災害をもたらす点から見れば、人間（ヒト）にとって脅威（マイナス）ですが、土地を肥沃にし、生命を維持するために必要なエネルギー・水・空気の循環を駆動させるという点から見れば、人間（ヒト）にとって大いなる恵み（プラス）です。どれだけ文明が発達しても、自然の脅威を完全に抑え込むことができないことを我々は知っています。とりわけ自然環境の厳しいアジアモンスーン地域では、人間（ヒト）が自然の一部であることは、哲学・文明論などで当然のように受け入れられてきました。自然の脅威に耐え忍び、その恵みと共存するという人間（ヒト）の立ち位置が、多元論的な思想・文化を発達させたのです。自然環境が比較的穏やかな欧米では、事情は大いに異なりました。人間は、他の動物とは本質的に異なる特別なものであると考えられてきました。自然の脅威は、特別な

存在である人知で克服されなくてはならない、と考えるのです。ここに、人間と自然を対置させた2元論的な思想・文化が発達しました。自然環境が思想・文化・宗教に与える影響については多くの論考があるので、それらを整理しておきましょう。

図1は、いくつかの文献を参考に、アジア（とくにアジアモンスーン地域）と欧米における自然環境の違いが、それぞれの思想・文化に及ぼす影響を大胆にまとめたものです。

| | アジア | 欧米 |
|----|-------|--------|
| 気候 | モンスーン | 非モンスーン |
| 循環 | 季節性 | 単一的 |
| 自然 | 肥沃・多様 | 貧弱・単一的 |
| 思考 | 森林型 | 砂漠型 |
| 思想 | 多元論 | 2元論 |
| 価値 | 中庸・曖昧 | 善・悪 |
| 精神 | 忍従 | 克服 |
| 行動 | 調和(和) | 独立(個) |
| 規範 | 自然 | 契約 |
| 生産 | 非規格少量 | 規格大量 |
| 文化 | 破壊と更新 | 歴史重視 |

図1 アジアと欧米における自然環境の違いが思想・文化に及ぼす影響をまとめた表
参考文献[2][3][4]などを基に著者が整理した

インドネシアからフィリピン・台湾・日本に至る環太平洋地域（いわゆるアジアモンスーン地域）は、災害の坩堝です。台風の進路で日本人にはおなじみの地域ですが、地殻変動に関連したプレートも存在するため、地震活動や火山噴火の多発地域でもあります。まさに自然の脅威です。その一方、台風がもたらす降雨と、火山噴火がもたらす火山灰は、土地を肥沃にしてくれる二大要素であり、植物・動物など生命の多様性を生み出す源です。まさに自然の恵みです。モンスーンは、凄まじい災害と多大な恵みをもたらす両面性を持っているのです。強力な光（善）としての表面と、裏面としての深い闇（悪）をあわせもつ、1枚のカードのようなものです。従って、自然は克服できるものではなく、時が巡るまで忍従すれば、大いなる恵みを与えてくれる、生命にとっての偉大な規範なのです。アジアモンスーン域で、思想が多元論的になり、行動様式・価値観として、調和・中庸が重んじられるのは当然と言えましょう。戦後、欧米型の資本主義経済や民主主義の勃興で、日本も規格大量生産や個人主義が優勢になったとはいえ、法・契約よりも集団の目が行動規範となりがちなこと（赤信号みんなで渡れば怖くない「ビートたけし」）、オンリーワンの多様性を生み出すモノづくり（非規格少量）など、多元論的な影響も色濃く残っているのです。新居・新車など日本人は無類の新しいものの好きです。一度の大洪水で文明のすべてを流し去ってしまうモンスーン域では、人間の所業など自然の前では取りに足らず、破壊と更新（スクラップ・アンド・ビルド）の文化が優勢になりがちです。

一方、欧米人は、ギリシャ・ローマなど人間が自然を克服して成し遂げた偉業に最大限の尊敬を払い、レンガの1つ1つを拾いあげるような情熱をもって遺跡修復を行います。ヨーロッパの街を訪れたら注意深く観察してみてください。ロマンチック街道はアジア人にとって大変素敵な景観ですが、このような背丈の低い花群落は土壌の貧困さゆえであり、栄養分に富む土壌では日本の街の隙間にできた空き地のようにあっという間に草ボーボーになるものです。南ドイツの黒い森（ブラック・フォレスト）と呼ばれる針葉樹林は、わずか20m/s超の風で、あっけなく木々が倒れていきます。根茎が脆弱な証拠なのです。脆弱な自然とは対照的に、人間の偉業と歴史に対する敬意と尊敬は、アジアの人間の想像を遥かに超えています。広大なブドウ畑の丘の上に忘れ去られたように佇む小さな古城にさえも税金が投入され維持管理されています。旧市街のコミュニティーの中心となる教会は永遠に改修中と思われるほどの執念で保護されています。人間を特別視して、自然を克服してきた人間中心主義の欧米思想が、個の尊重や、それらの利害関係を規定する規範として契約を採用し、自然—人工、善—悪、といった二元論的思想を採用するのは必然にも思えるのです。複雑に見える物事や事象を、パーツごとに細かく分解して、その部分を理解することにより全体を理解しようとする要素還元主義は、ヨーロッパから生まれました。アジアでは、複雑な自然全体・システムそのものをできるだけ分解せずにホーリスティックに理解しようとするのです。

これから展開する人間分子論は、アジアモンスーン的な思考に近いものです。自然の大循環における1つの渦として、人間（ヒト）を単純化し、モデル化していきます。メタファー（暗喩）を用いた一種の「見える化」の作業です。理系が複雑な現象を解明する際に常套的に用いる大胆なモデルアプローチに範をとったものです。

（注1） 厳密には、自然の本質は、エネルギーだけです。自然を地球の外の宇宙空間にまで広げれば、水や空気や物質は存在しません。水や空気や物質もエネルギーであり、基本的にはエネルギーが形を変えて循環しているのです。

（注2） 地球上でのエネルギー保存則とは、地球と太陽との間でやり取りさせるエネルギーの収支決算です。とても単純で、太陽光線が、地球にとってのエネルギー獲得であり、地球の放射冷却（赤外線が宇宙空間に逃げていくこと）が、エネルギー損失です。水や物質などの質量保存則も、地球上の多くの一般的状況において成立しますが、厳密に保存するのはエネルギーだけです。例えば、核分裂反応においては、物質の質量は保存されません。質量エネルギーの減少分が原子力エネルギーに変換されるからです。この場合も、エネルギーは保存されます。

さらに厳密に言えば、太陽と地球のエネルギーは完全には釣り合っておらず、地球は（他の天体も）、数十億の時間スケールで見れば、少しずつ内部のエネルギーを宇宙空間に失いながら、冷え続けています。

参考文献

- [1] 吉成真由美[インタビュー編]、知の逆転、NHK出版新書
- [2] 鈴木秀夫、森の思考・砂漠の思考、NHKブックス 312
- [3] 和辻哲郎、風土 人間学的考察、岩波文庫